

高 本 古 墳 群

1986年3月

総社市教育委員会



高本古墳群調査後の全景（北東から）



高本2号墳第1主体部（西から）

序

古代吉備文化発祥の地として栄えた総社市には、数多くの埋蔵文化財の存在が知られています。これらは、貴重な歴史的資料であり、後世に伝えていくことが現代に生きる私たちの責務であります。

今回の発掘調査の結果、古墳時代前期における古墳の実態の一部が明らかになりました。本書が文化財の保護保存に活用され、あわせて郷土の歴史解明に役立てば幸いです。

調査にあたっては、岡山県教育委員会、新成建材株式会社をはじめ関係各位から多大な御指導と御協力をいただきました。さらに、地元の方々には発掘作業にお骨折りいただきました。あわせて厚くお礼申し上げます。

昭和61年3月

総社市教育委員会

教育長 浅 沼 力

例 言

1. 本書は、総社市教育委員会が国庫補助を受けて実施した「高本古墳群」の発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、文化係職員村上幸雄、谷山雅彦、高田明人が担当し、主に谷山雅彦が行い、昭和60年5月8日から7月16日まで実施した。
3. 出土遺物の整理は、社会教育課服部収蔵庫にて行い、報告書作成後は同所に保管している。
4. 本報告書の執筆、編集は、谷山雅彦が行った。
5. 遺物整理、報告書作成にあたっては、村上敏子（社会教育課服部収蔵庫）が一部を担当した。
6. この報告書の高度値は海拔高であり、方位は磁北である。
7. 第3図の地形図は、国土地理院発行の50,000分の1の地図（岡山北部）を複製したものであり、第4図は、総社市発行のものを複製したものである。
8. この報告書に関する実測図、写真、遺物等は、服部収蔵庫で保管している。
9. 航空写真は水島機械金属工業団地協同組合の好意により西日本建設コンサルタント株式会社から提供していただいた。
10. 遺跡発見時に、高本9、10、11、12号墳とした名称を報告書作成にあたり高本2、3、4、5号墳とし、主尾根稜線上の高本5号墳を高本1号墳と改称した。

目 次

序 文

例 言

第1章 調査の経緯	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の体制	2
第2章 地理的歴史的環境	3
第3章 調査の経過	5
第4章 高本古墳群	8
第1節 位置と環境	8
第2節 高本2号墳	8
第3節 高本3・4号墳	15
第4節 高本5号墳	17
第5節 出土遺物	19
第6節 まとめにかえて	24

図 目 次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 山土採集計画図	3
第3図 遺跡周辺図	4
第4図 高本古墳群周辺古墳分布図 (S=1/5,000)	7
第5図 調査前と調査後の墳丘図 (S=1/800)	9
第6図 調査前(上)調査後(下)の2号墳 (S=1/200)	10
第7図 2号墳墳丘断面図 (S=1/100)	11
第8図 2号墳第1主体 (S=1/40)	12

第9図	2号墳第2主体 (S=1/40)	13
第10図	2号墳その他の遺構 (S=1/40)	14
第11図	出土遺物 (S=1/4)	14
第12図	3・4・5号墳調査前 (S=1/400)	15
第13図	3・4号墳調査後 (S=1/200)	16
第14図	3・4号墳断面図 (S=1/200)	16
第15図	3・4号墳断面図 (S=1/200)	16
第16図	5号墳調査後 (S=1/200)	18
第17図	5号墳縦横断面図 (S=1/100)	18
第18図	5号墳主体部 (S=1/40)	19
第19図	4・5号墳間土壌 (S=1/40)	19
第20図	出土遺物1	21
第21図	出土遺物2	22
第22図	出土遺物3	23
第23図	家形埴輪模式図	23

図 版 目 次

図版1	高本古墳群全景	25
図版2	1. 高本古墳群近景 (北から) 2. 高本古墳群近景 (東から)	26
図版3	1. 2号墳北西トレンチ (北から) 2. 2・3号墳間トレンチ (南から)	27
図版4	1. 1・2号墳調査前の墳丘 (西から) 2. 2号墳調査前の墳丘 (南から)	28
図版5	1. 2号墳表土除去後 (南から) 2. 2号墳表土除去後 (北から)	29
図版6	1. 2号墳表土除去後 (南東から) 2. 第2主体部 (西から)	30
図版7	1. 第2主体部 (南から) 2. 第1主体部〈向う側〉と第2主体部〈手前〉 (北西から)	31
図版8	1. 第1主体部 (南から) 2. 第1主体部断面 (西から)	32
図版9	1. 第1主体部検出状態 (南から) 2. 第1主体部蓋石除去後 (北から)	33
図版10	1. 第1主体部 (西から) 2. 第1主体部蓋石除去後 (西から)	34
図版11	1. 第1主体部〈手前〉と第2主体部〈向う側〉 (南から) 2. 調査後の墳丘 (南から)	35
図版12	1. 2号墳調査後の墳丘断面 (西から) 2. 第2主体部 (西から)	36
図版13	1. 墳丘断面 (南から) 2. 周溝断面 (西から)	37

図版14	1. 配石遺構（北から）	2. 配石遺構（西から）	38
図版15	1. 3・4・5号墳調査前の墳丘（南東から）		
	2. 3・4号墳調査前の墳丘（南から）		39
図版16	1. 3号墳調査前の墳丘（北西から）	2. 3号墳表土剥ぎ	40
図版17	1. 3号墳調査前の墳丘（南から）	2. 調査後の墳丘（南から）	41
図版18	1. 4号墳調査前の墳丘（南から）	2. 調査後の墳丘（南から）	42
図版19	1. 3号墳墳丘断面（北西から）	2. 3号墳周溝断面（南から）	43
図版20	1. 5号墳調査前の墳丘（北西から）	2. 表土除去後（南西から）	44
図版21	1. 5号墳墳丘断面（北西から）	2. 5号墳墳丘断面（南から）	45
図版22	1. 5号墳墳丘断面（南西から）	2. 主体部断面（南東から）	46
図版23	1. 主体部断面（南西から）	2. 主体部断面（西から）	47
図版24	1. 主体部（南東から）	2. 4・5号墳間土壌（南から）	48
図版25	1. 3・4号墳調査後の墳丘（南東から）		
	2. 5号墳調査後の墳丘（西から）		49
図版26	1. 3・4・5号墳調査後の墳丘（南東から）		
	2. 3・4・5号墳調査後の墳丘（南から）		50
図版27	1. 1号墳調査前の墳丘（北から）	2. 1号墳葺石（北西から）	51
図版28	1. 墳丘断面（北から）	2. 墳丘断面（西から）	52
図版29	出土遺物 1		53
図版30	出土遺物 2		54
図版31	出土遺物 3		55
図版32	出土遺物 4		56

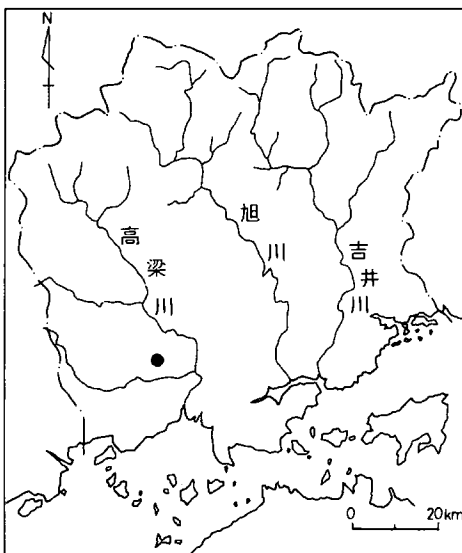
第1章 調査の経緯

1. 調査にいたる経過

岡山県の南西部に位置する総社市は、吉備高原の南端にあたり平野部には低丘陵が無数に存在している。これらの丘陵には、古墳が数多く存在し県内でも有数の古墳密集地として知られており、その数は、800基を越えている。しかし、古墳の存在する丘陵の土壌が花崗岩の風化土である良質の真砂土であるため市内各所で大小の土採りが行われている。今回、調査した丘陵においても高本地区に隣接する久代（山田）地区では以前より土採りが行われていた。

昭和57年7月に新成建材(株)から事業計画面積22,629㎡の山土採取事業計画が出された。このため計画地を含め丘陵上を現地踏査した。この地は、吉備郡史（註1）に藤原北谷古墳群として10基の古墳が記述されていて、この藤原北谷1が高本1号墳に該当すると思われる。踏査した時、新たに北西に派生する尾根上で4基の古墳を確認した。これらは、いずれも低平な墳丘で一部埴輪片が採集され前期古墳であることが推定された。他に1号墳の北東に延びる平坦部に3基の古墳が存在することが推定された。また、谷を挟んだ計画地北東隅から延びる丘陵稜線上で藤原北谷古墳群を確認した。

この結果をもとに新成建材(株)と文化財保護に関する覚書を締結し保存協議を行った。その結



第1図 遺跡の位置

果、計画地のほぼ中心をなす新規に古墳が確認された小尾根については変更が困難であるため発掘調査を行うこととなった。しかし、丘陵稜線上に位置する古墳については現状保存が図られることになった。

発掘調査は、昭和60年6月から2, 3, 4, 5号墳の4基について実施する予定になり昭和59年12月に立木伐採後古墳の範囲について新成建材(株)に立会いを求め確認した。しかし、昭和60年になって土採りが急ピッチで進行する要因ができたため1ヶ月早め、5月から調査に入るようになった。この時には、既に墳端近くまで重機が来ていた。

2. 調査の体制

発掘調査は、昭和60年度国庫補助（一部原因者負担）事業として、総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導助言のもとに実施することとなった。調査は、昭和60年5月8日から7月16日まで実施した。なお、調査にあたっては新成建材(株)には経費の負担をはじめとして種々の便宜を図っていただいた。また、発掘作業については地元住民の方々の協力を得た。記して厚く謝意を表します。

調査組織

社会教育課（文化係）

課長 樋口文男

課長補佐 村上幸雄（調査担当）

主事 小田 求（庶務担当）

主事 谷山雅彦（調査担当）

主事 高田明人（調査担当）

作業員 梶井明雄，河崎透夫，神崎 勲，別府義男，横田武夫，牧野 悟

鎌田喜志恵，神崎一子，田中トキエ

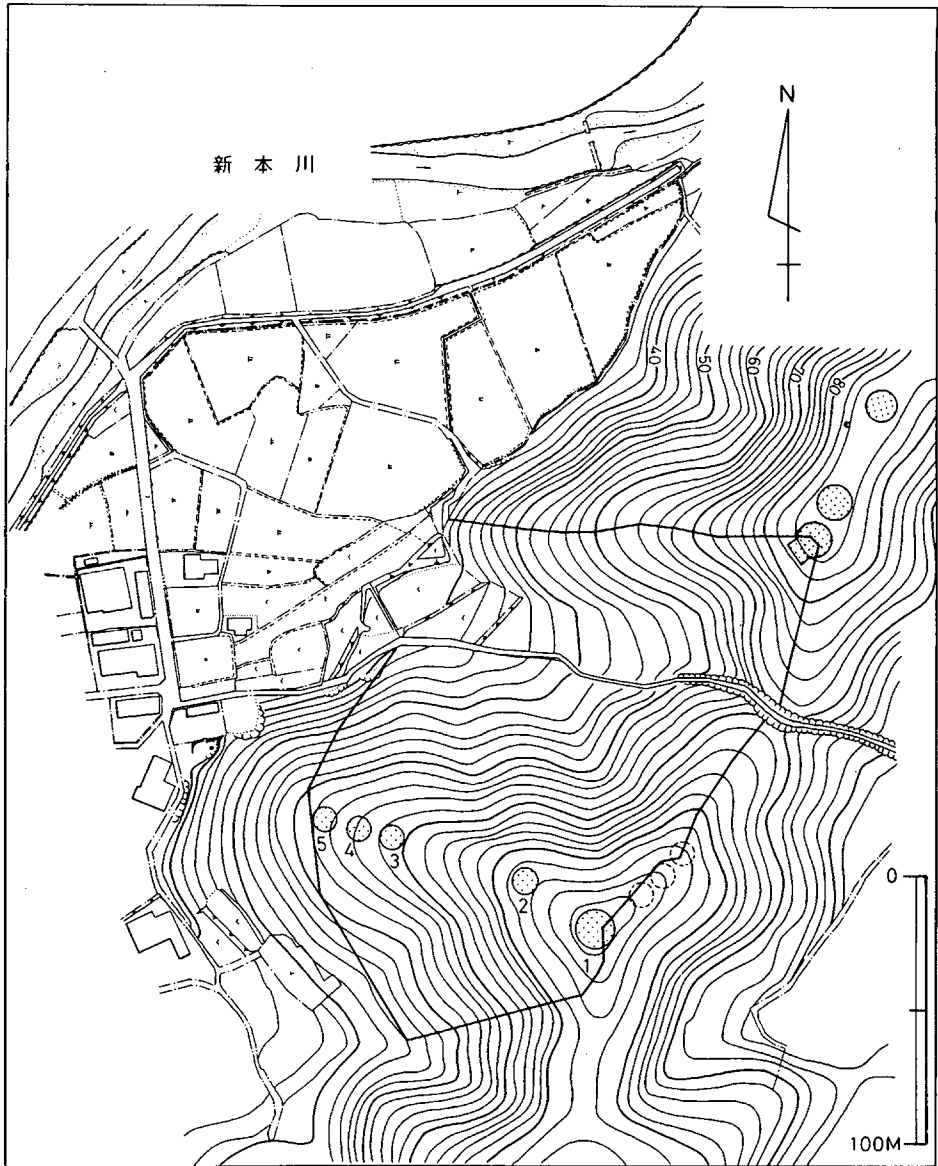
なお発掘調査には下記の方々からは温かい援助・御指導を得たことを記し、厚くお礼申し上げます。

岡山県教育委員会 河本 清，正岡睦夫，松本和男

岡山県史編纂室 葛原克人

岡山理科大学 亀田修一

京都市埋蔵文化財研究所 田辺昭三



第2図 山土採集計画図

第2章 地理的・歴史的環境

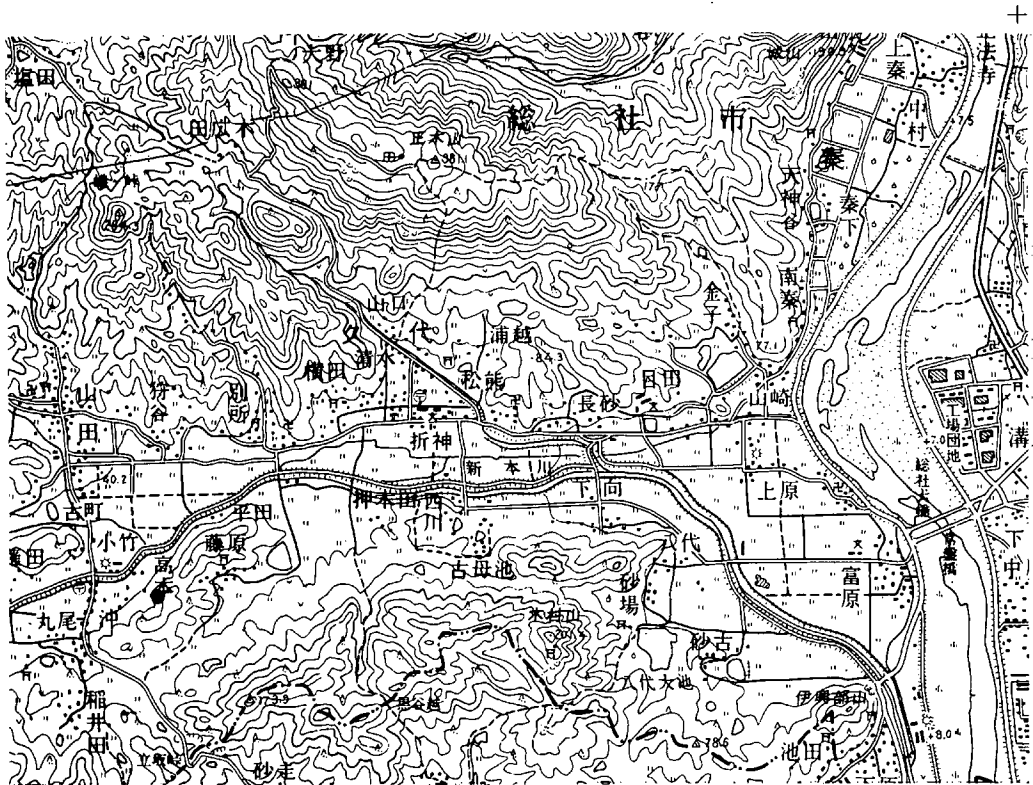
高本古墳群は、総社市新本高本に所在する。

総社市は、岡山県南西部に位置し北は吉備高原南端、南は標高300m級の山並に囲まれ、その

間に東西に細長い平野部をもつ。さらに、市内のほぼ中央を県内三大河川の一つ高梁川が西北から南東に横断している。高梁川以東の平野部は、かつて高梁川が市内湛井から市街地を抜け三須・上林を通り、画聖雪舟誕生地といわれる赤浜から足守川へと流れる旧河道や、小寺・福井など西山の低丘陵南端をそうように流れ北溝手から上林に流れる旧河道など高梁川の分流が運びこんだ多量の土砂が肥沃な平野を構成している。

高梁川以西では、西方から高梁川に注ぎこむ新本川両岸に平野が形成されている。これは谷あいから流れ出た雨水が長い年月をかけて山を削り堆積して出来た平野部である。

総社市東部は、全国第9位の作山古墳、こうもり塚古墳（註2）、江崎古墳（註3）などの著名な古墳が多く、備中国分寺・尼寺跡また備中国府跡なども存在している。そのため、多くの研究者の関心を集めている。一方高梁川以西でも以東ほどではないにしても多くの遺跡が知られている（註4）。弥生時代後期の墳墓遺跡である立坂遺跡、同時代の伊興部山遺跡、また、最近圃場整備事業に伴う調査で人面を線刻した土器が新本一倉から出土している。古墳では、新本川左岸の丘陵に多く存在し、秦上沼古墳からは三角縁神獸鏡が出土している。金子の横穴式石室（註5）には、こうもり塚古墳や江崎古墳に収められた石棺と同じ貝殻石灰岩を用いた家



第3図 遺跡周辺図

形石棺が知られている。

今回、調査を行った高本の付近では、市内新本から真備町へ抜ける立坂に古墳群があり、さらに西の稲井田では19基の古墳が知られている。この外にも、藤原古墳群、藤原北古墳群、丸尾古墳群、恩部古墳群、猿渡古墳群が知られている。また、これらの古墳群は比較的小規模な古墳であるが、新本川左岸の砂子山古墳群（註6）は、全長30m以上の前方後円墳が同一丘陵上に三基並んで存在し古墳時代前期における新本川流域の主要な首長墓と考えられている。高本古墳群の存在する丘陵頂部の古墳はこれらの首長に次ぐ有力者が築造したと考えられる。

第3章 調査の経過

調査対象となった北西方向に派生する小尾根は、東西に細長いため立木を伐採かたづけを行いながら200分の1の地形図を作成した。

2号墳と3号墳の間には現状では古墳が存在することが確認できないのでトレンチにより確認調査を行った。トレンチは、尾根稜線に平行に長く、これに直行する方向に2本設定した。この結果、表土直下は60cmほど硬質地山上に地山風化土が堆積していたが人為的な盛土は確認できず遺物も出土しなかった。

古墳の調査は、3号墳から始め、4・5号墳と進めていった。3・4号墳は、内部主体が失われていたが5号墳では墓塚が確認されたので5号墳主体部の調査と2号墳の表土剥ぎとを並行して行った。5号墳主体部から副葬品は出土しなかった。

2号墳では、表土剥ぎの段階から第2主体部の石が露出した。これに平行して第1主体部が検出された。いずれも花崗岩の板石を利用した箱式石棺で副葬品は出土しなかった。

1号墳では、立木伐採後墳丘南側で葺石が確認された。墳端確認トレンチでは葺石の残り状態は良くなかった。これは墳丘全体に言えるようである。規模は、南北17m、東西18mの円墳と推定される。

1号墳の北側にも平坦な尾根が延びているので古墳が存在していると推定されるが調査時の踏査では確認できなかった。

調査は、2号墳の石棺を解体し、搬出して全ての調査を終了した。

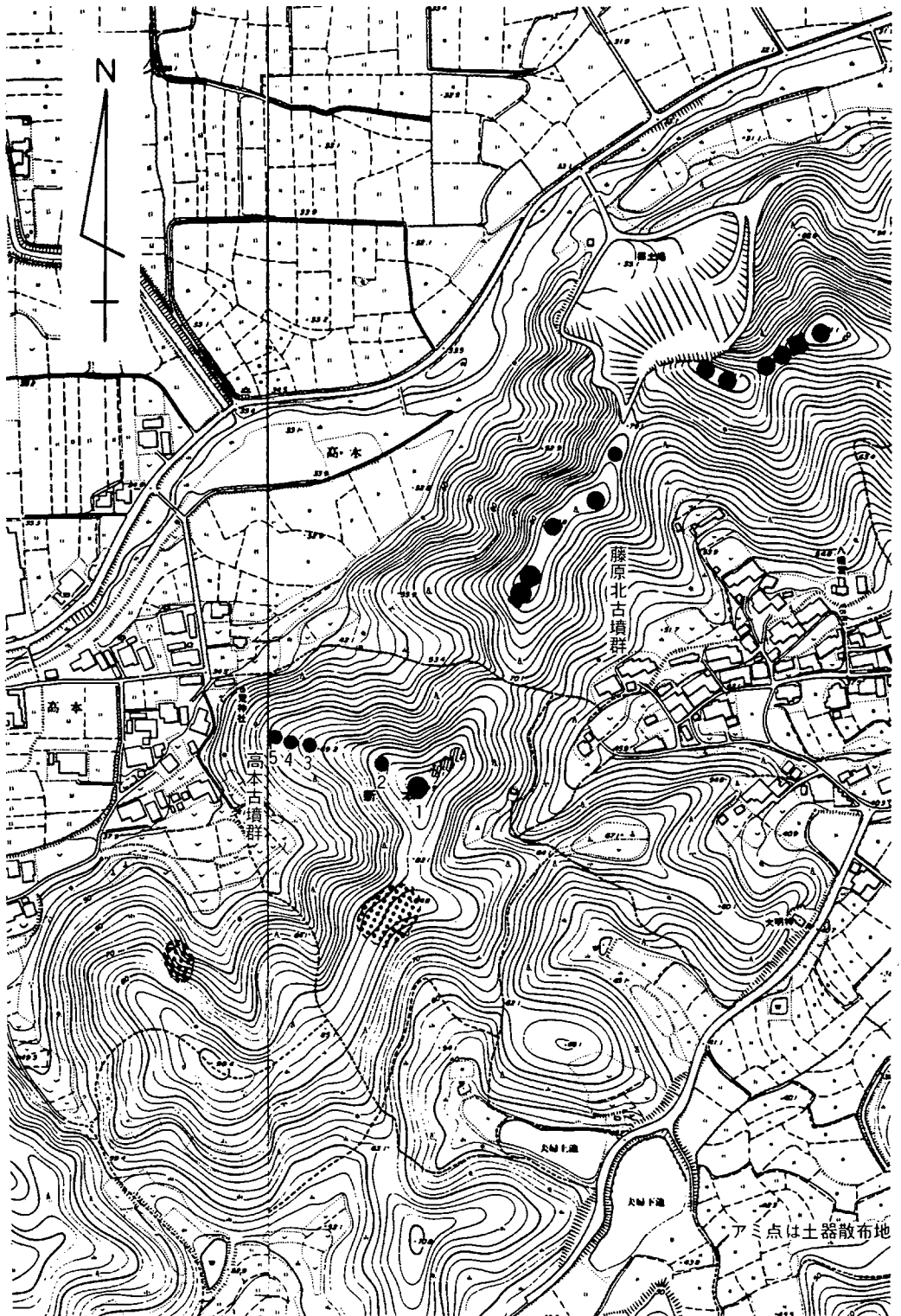
日誌抄

60年5月8日 調査開始。伐開後の清掃作業。発掘前の墳丘測量を開始する。

5月10日 2号墳北トレンチ掘り始め。

5月13日 2号墳北トレンチ掘り上がり、遺構なし。

- 5月15日 3・4号墳の開墾際ぞいにトレンチを入れる。
- 5月16日 3・4号墳トレンチ完掘。4号墳北、トレンチ壁埴輪片出土。
- 5月17日 3号墳表土剥ぎ開始。家形埴輪片出土。
- 5月21日 3号墳南西、周溝確認トレンチから須恵器片1出土。
- 5月22日 3号墳周溝掘り下げ開始。
- 5月23日 4号墳表土剥ぎ開始。
- 5月24日 3号墳主体部は検出されず、すでに開墾時に削平されたと考えられる。3・4号墳間から埴輪片出土。
- 5月25日 4号墳北側周溝掘り下げ開始。
- 5月27日 4号墳主体部は検出されず、3号墳同様すでに削平されたと考えられる。4号墳北西から家形埴輪片出土。
- 5月28日 5号墳周溝掘り下げ開始。
- 5月30日 5号墳主体部検出作業に入る。
- 6月3日 5号墳横断トレンチを中心まで延ばし、主体部を確認。
- 6月5日 5号墳主体部掘り始め、遺物なし。
- 6月7日 2号墳表土剥ぎ開始。
- 6月8日 2号墳第2主体部を検出。
- 6月10日 5号墳主体部調査完了する。
- 6月12日 2号墳第1主体部を検出。
- 6月14日 2号墳第1主体部、蓋石まで掘り下げ。周溝掘り下げ開始。
- 6月20日 2号墳第1主体部、蓋石を開く。遺物なし。
- 6月27日 調査区の水抜きの強化。
- 7月1日 2号墳調査後の墳丘測量を行う。
- 7月5日 2号墳周辺の遺構調査を開始。
- 7月11日 2号墳第1主体部部分のみ地山を掘り方まで掘り下げる。
- 7月15日 2号墳第1主体部を解体する。
- 7月16日 補足調査と機材搬出。



第4図 高本古墳群周辺古墳分布図 (S=1/5,000)

第4章 高本古墳群

第1節 位置と環境

調査墳は、総社市新本665ほかに所在する。

古墳群の所在する丘陵は、新本川右岸の北東から南西に連なる長さ約1キロの独立した丘陵で久代・山田・新本の大字境となっている。この丘陵は、大きく見ると標高103.0mの最高部を中心とした山田・久代地区と、今回調査した新本字高本地区、そしてさらに西の新本字沖・望地区の三地域に分かれる。

この三地域のうち高本地区以外では独立した土採りが以前より行われていたが、古墳の存在している丘陵頂部には到っていなかった。山田・久代(藤原)地区には、尾根稜線上に古墳が存在することが知られているが、新本沖・望地区では古墳は確認されていない。また、高本についても尾根頂部の古墳は知られていたが、これから北西に派生する小尾根の古墳は知られていなかった。

土採り計画地は、新たに古墳が発見された小尾根から東の谷を挟んで山田との境までを対象としている。

調査墳のうち、1号墳は尾根頂部に位置し、2号墳は1号墳から派生する小尾根の付け根に位置する。2号墳から3号墳までは自然傾斜が続き標高70m付近から3、4、5号墳が並んで配置し5号墳の西は急斜面となり古墳は存在しない。3・4号墳は南側半分が畑に開墾された時期があり失われていた。

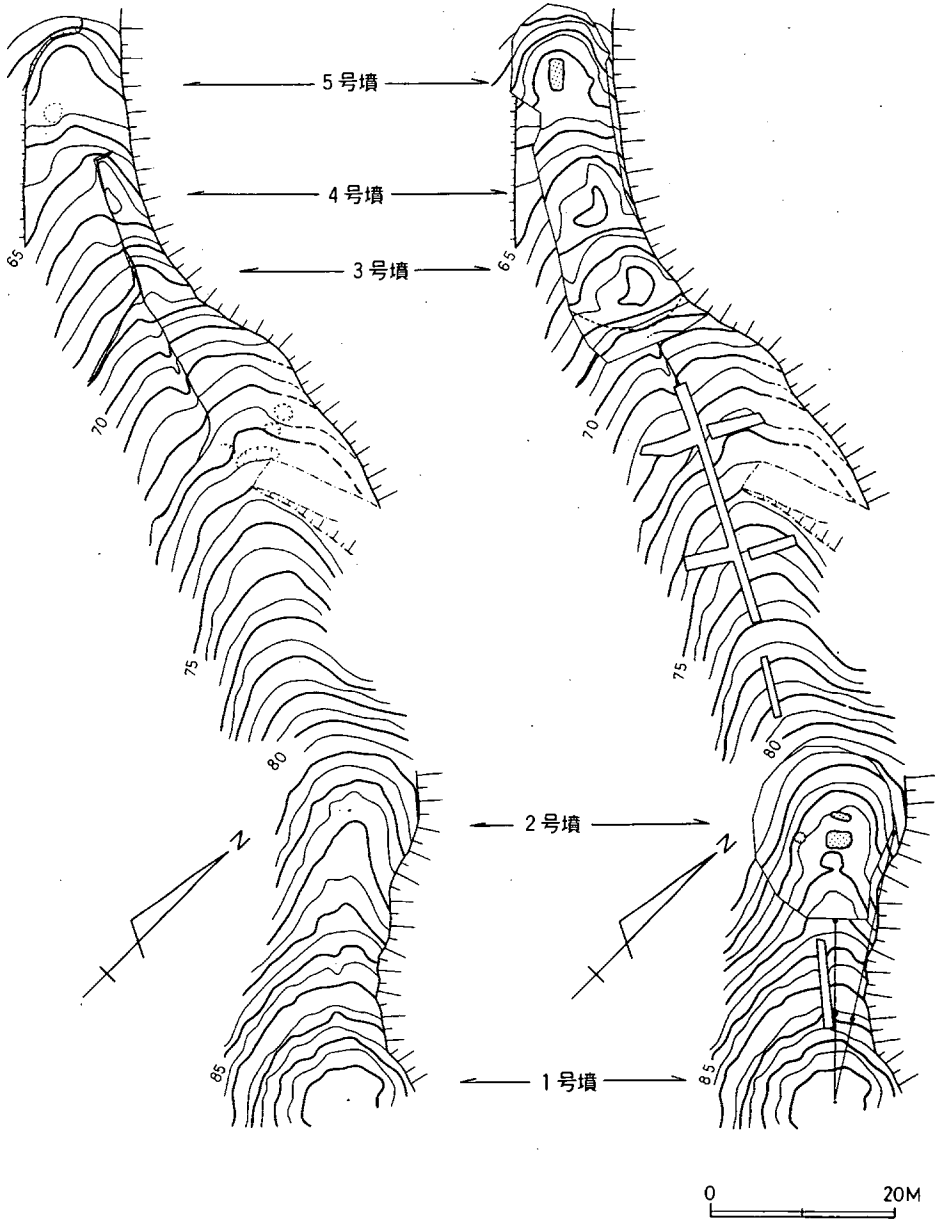
高本古墳群の存在する丘陵上には前期と考えられる古墳は存在するが、後期古墳は知られていない。また、調査区西の谷を挟んだ西の小尾根東斜面には弥生時代後期の土器が出土する場所が知られている。

第2節 高本2号墳

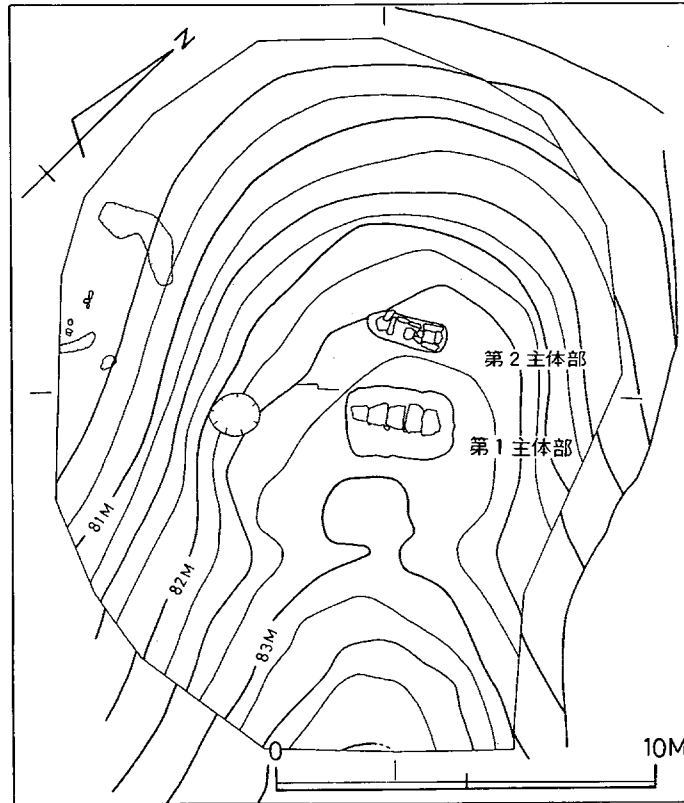
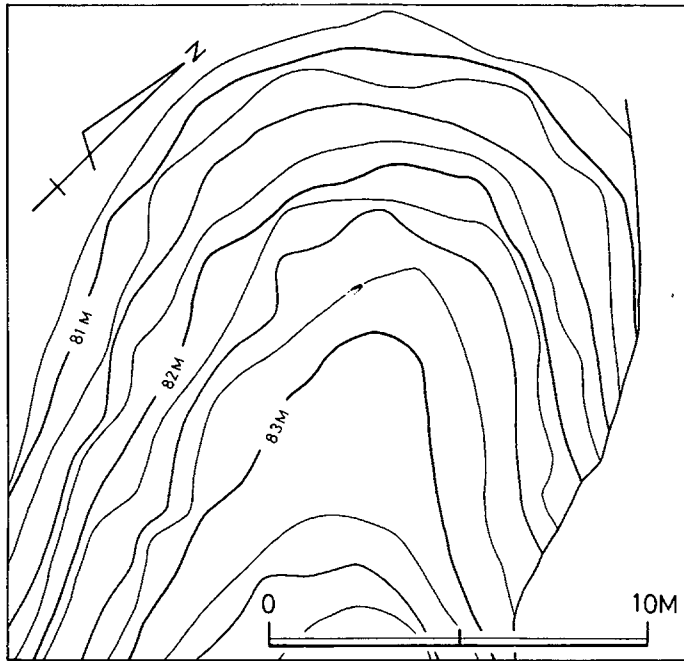
1. 調査前の状況

2号墳は、1号墳の北、尾根頂部からやや下った平坦部で立ち木があった時には確認できな

かった。伐採後の現地調査で確認できた。2号墳北側は、墳頂平坦部からやや下った墳端近く
 でわずかに平坦となり自然傾斜に移行する。東側は、土採りが墳端近くまで及んでいる。西側
 は、深く入り込む谷となり急傾斜で墳端は明確でない。



第5図 調査前と調査後の墳丘図 (S=1/800)



第6図 調査前(上)調査後(下)の2号墳 (S=1/200)

2. 墳 丘

表土剥ぎに先立ち土層観察用の畦を十字に残した。

表土は、一様に薄く墳頂では第2主体部の一部が露出した。十字に残した畦に沿ってトレンチを設け墳端を検出した。

その結果、墳丘規模は南北8m、東西10mの円形を呈する古墳と推定された。

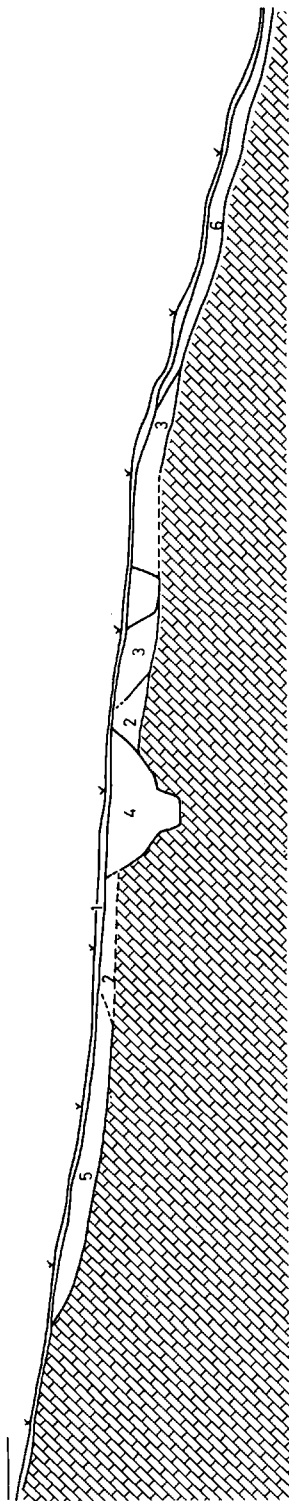
墳丘は、地山をそのまま利用し北側斜面に淡灰白色砂質土の盛土を行っている。地山は、花崗岩の風化土でその上に暗黄灰色砂質土が40cm程度堆積している。西斜面では、地山との間に淡黄白色砂質土、淡黄褐色砂質土が見られる。これらの堆積層は、墳丘築造時にはすでに堆積していたと考えられる。

3. 周 溝

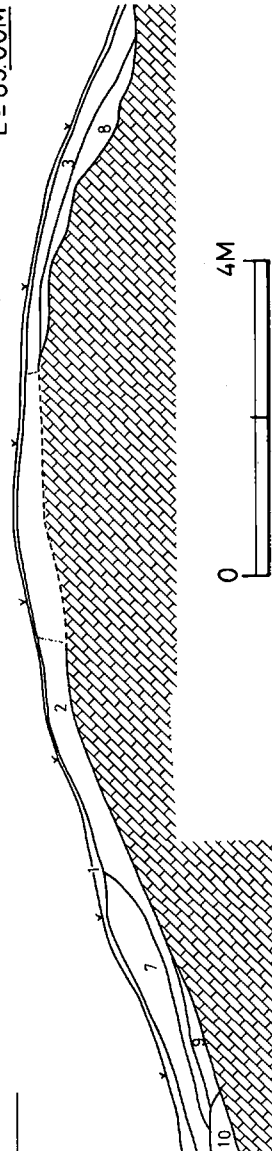
周溝は、南山側では浅く掘りくぼめた暗灰色砂質土が見られたが、他では明確に押えられなかった。

4. 埋葬施設

L = 84.30M



L = 83.00M



1. 表土 2. 暗黄灰色砂質土 3. 淡灰白色砂質土 4. 暗灰褐色砂質土 5. 暗灰色砂質土
6. 淡黄灰色砂質土 7. 淡黄白色砂質土 8. 淡黄褐色砂質土 9. 淡黄白色砂質土 10. 淡黄白色砂質土



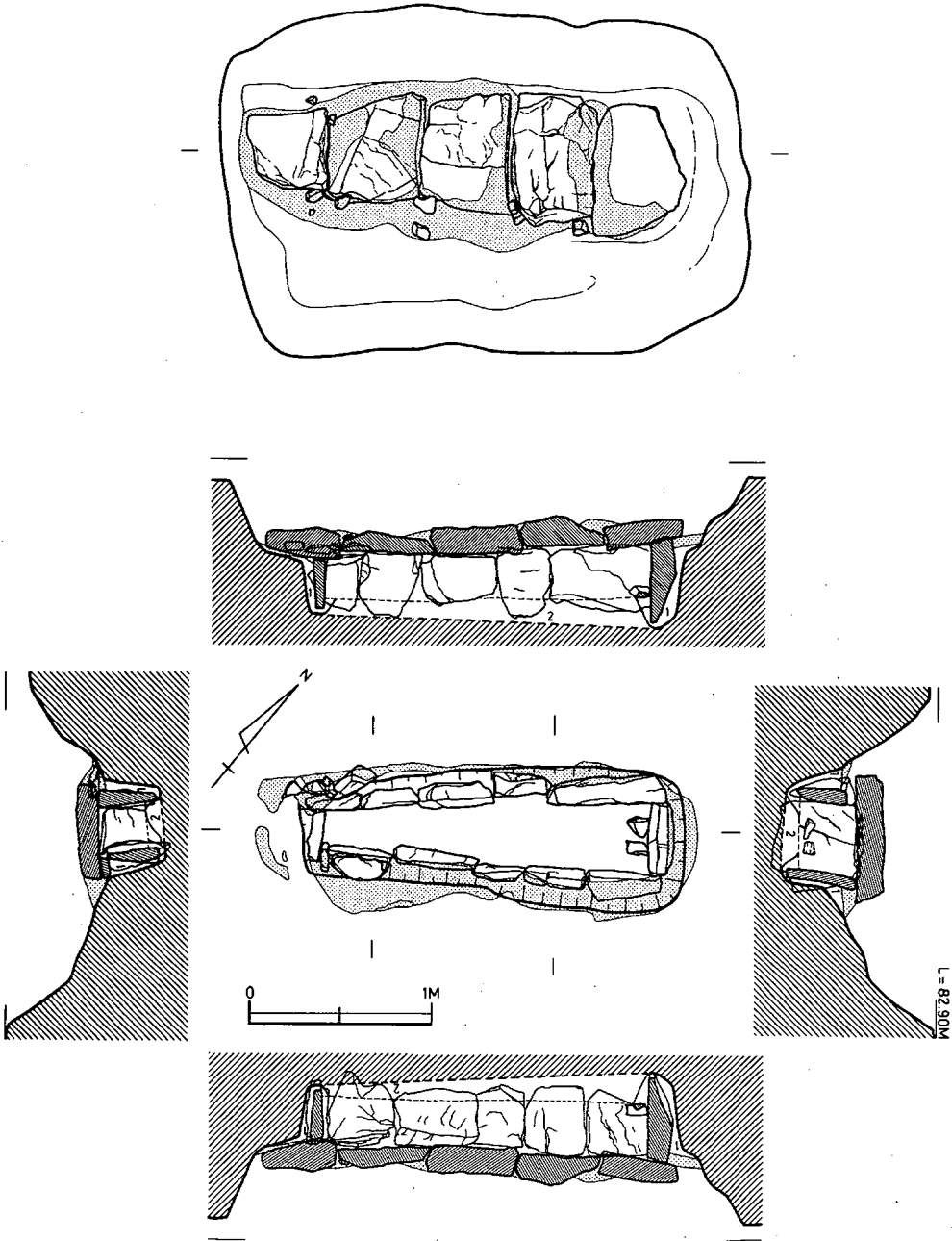
第7図 2号墳墳丘断面図 (S=1/100)

主体部は、2基検出された。山側で検出されたのを第1主体部、その北側で平行に検出されたのが第2主体部で、それぞれ尾根に直交してつくられていた。

第1主体部

第1主体部は、盛土上面で検出することがやや困難であったので、わずか下げて検出作業を行った。墓壇は、盛土上面から掘り込まれていた。長さ約2.9m、幅1.8mの隅丸長方形の墓壇を検出した。墓壇掘り込みは、上部は広く下部は箱式石棺板石に接するほどに狭まる。

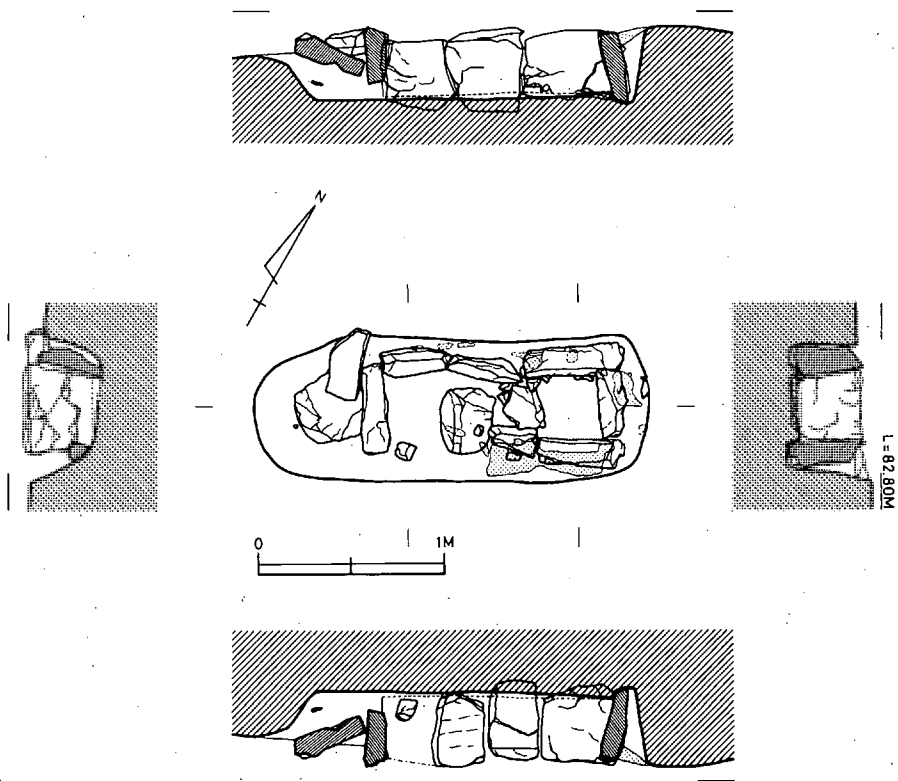
箱式石棺は、頭部に近い石材には比較的大型の石を用い、足元では石材が小型になり側壁の上面を揃える



第8図 2号墳第1主体 (S=1/40)

ため割石を乗せている。規模は、内法で全長1.78m，幅37~17cmを測る。床面には真砂土を敷き墓室内東端に枕石が認められた。副葬品は出土しなかった。

第2主体部



第9図 2号墳第2主体 (S=1/40)

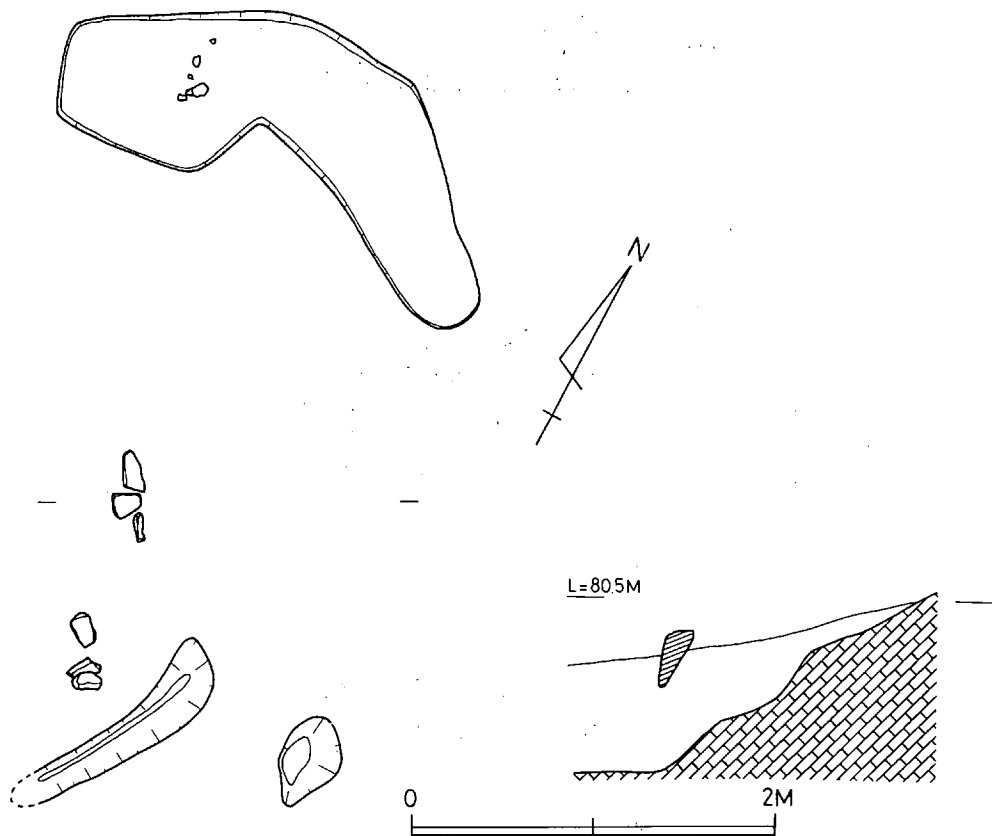
第2主体部は、第1主体部の北側に位置し、第1主体部と平行に並ぶ。表土を除去する際、石材が露出した。墓壇は、盛り土上面で検出された。墓壇掘り込みは、長楕円形を呈し、西小口外にも石材が認められた。これは、小口に使用した石が他の石に比べ小形で不安定なので支えに用いられたと考えられる。長さ2.11m、幅75cmを測る。

箱式石棺は、蓋石は既になく側壁の一部が抜かれ内側に倒れ込んだ石もあった。規模は、内法で全長1.16m、幅36cmを測る。

第1主体・第2主体部共に花崗岩の板石を使用した箱式石棺で頭部と考えられる位置には比較的安定した石材を用い、足元に近づくにしたがい小さくなるようである。側壁が据えられた後、粘土で目張りを行い第1主体部では蓋石の状況から足元から石を乗せて蓋をしたようである。その後、蓋石の隙間に小石を詰めさらに粘土で目張りをしていた。

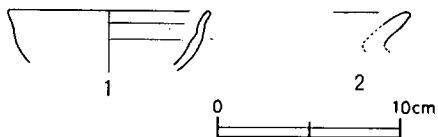
その他の遺構

2号墳西方で配石遺構が検出された。これは地山が急激に下がり始めそこに淡褐色砂質土が厚く堆積した所に3個の石が並べられていた。他にも同様の石が浮いた状態で存在していたのでこの石列が延びていたことが考えられる。また、配石遺構の北に浅い落ち込みがあり土器が



第10図 2号墳その他の遺構 (S=1/40)

出土した。



第11図 出土遺物 (S=1/4)

思われる。色調は淡黄赤色を呈し、細砂粒を含む。

2は甕形土器の口縁部で配石遺構の北の浅い落ち込みから出土した。くの字に外反する口縁部で、図示できなかったが同一個体と考えられる胴部の破片も出土している。調整は、胴部外面は刷毛目、内面はヘラ削りで仕上げている。色調は赤黄色を呈し、砂粒を含む。

第3節 高本3・4号墳

1. 調査前の状況

3・4号墳は、2号墳から50m西方の同一の尾根上に位置する。両墳とも2・5号墳に比べ墳丘の高さがあり古墳の確認が容易にできた。

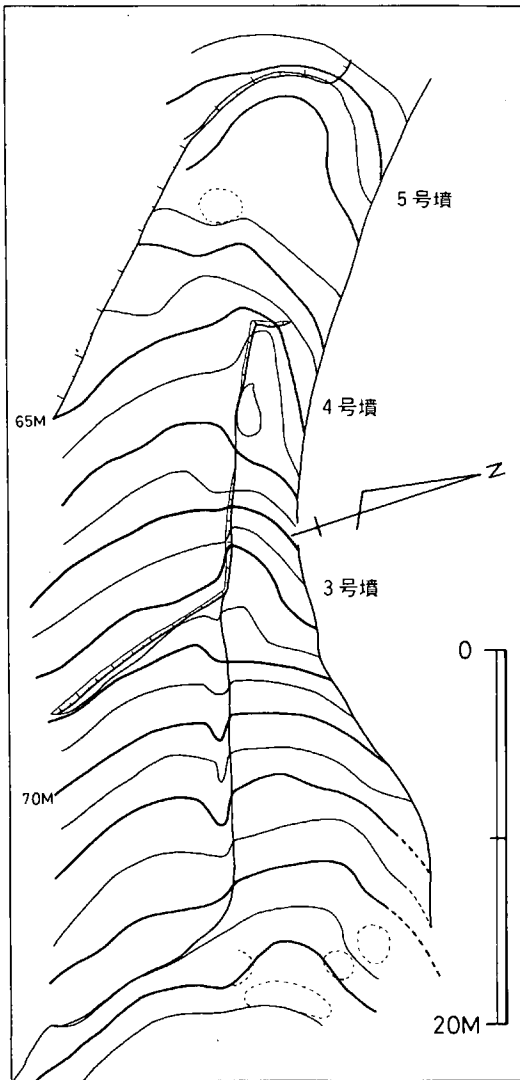
両古墳の北側は土採りが墳端近くまで来ており3号墳東、山側に亀裂が生じていた。古墳南側は調査前に開墾のため墳丘半分が約50cm下げられていた。地元の話ではこの時、土器と刀が出土したといわれている。また、4・5号墳の間に集石がありこの中に埴輪片が混在していた。

2. 墳 丘

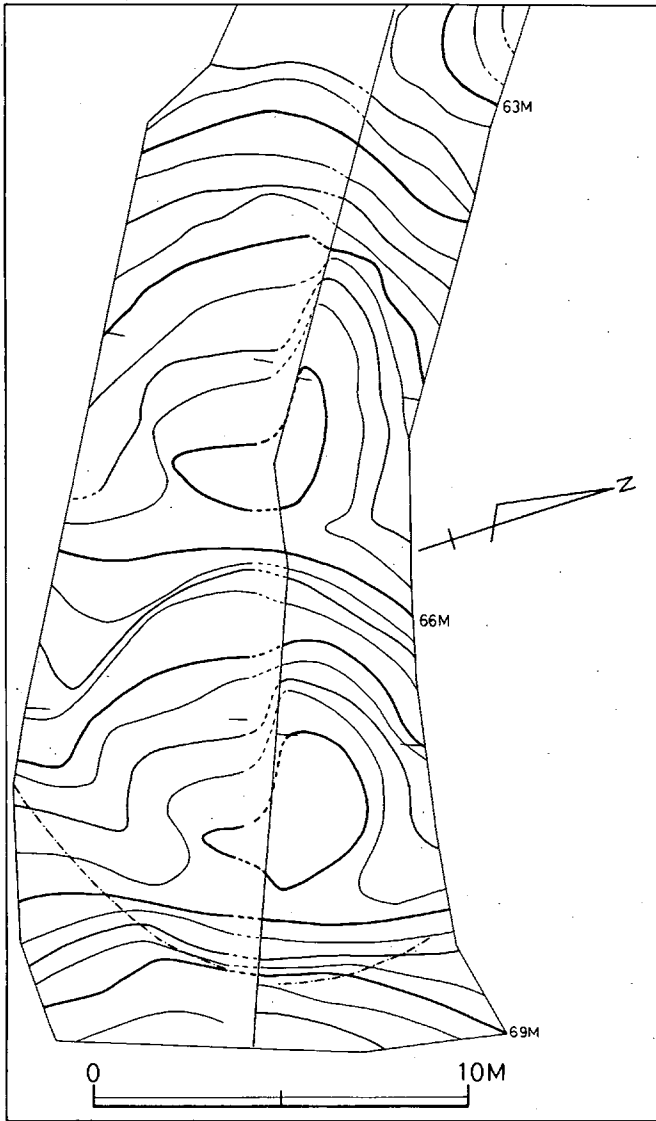
表土剥ぎに先立ち開墾時の断面に沿ってトレンチを設定した。断面の観察から3号墳の山側には周溝が確認されたが3・4号墳間の周溝は、はっきりしないことがわかった。墳丘は表土直下で現われ、固い風化のあまり進んでいない地山上の軟質な地山を平坦にし、3号墳では淡黄褐色砂質土を、4号墳では淡黄白色砂質土を約50cm盛っている。墳丘規模は3号墳で南北8m、東西7.3mの円形を呈する古墳と考えられる。4号墳は残りのよい北半分についても墳丘盛り土が削られていたため墳端が明らかではないが5号墳間の周溝まで考えると南北7.5m、東西11.5mの尾根方向に長い楕円形を呈する古墳と考えられる。

3. 周 溝

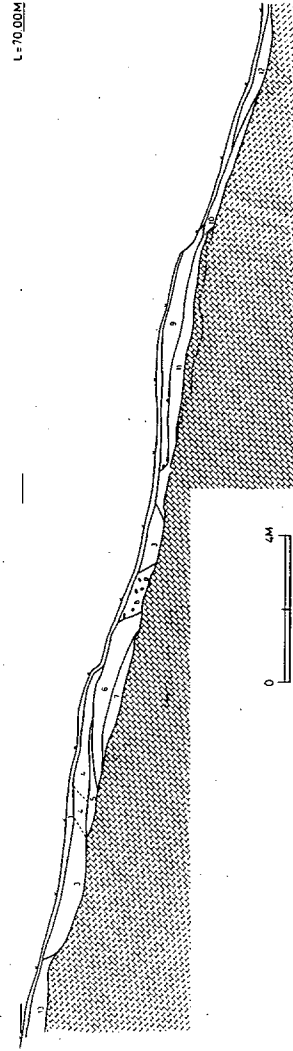
3号墳の山側は調査前から周溝状を呈していた、周溝は地山と地山の風化土である淡茶白色砂質土を掘り込んでいた。周溝内の堆積土と盛り土とは似通った土のため墳端は硬質の地山が立ち上がる所



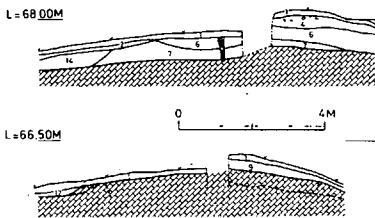
第12図 3・4・5号墳調査前 (S=1/400)



第13图 3·4号墳調査後 (S=1/200)



第14图 3·4号墳断面图(S=1/200)



第15图 3·4号墳断面图 (S=1/200)

- 表 土
1. 淡灰褐色砂質土
 2. 暗茶灰色砂質土
 3. 淡黄褐色砂質土
 4. 淡灰白色砂質土
 5. 淡灰褐色砂質土
 6. 淡黄褐色砂質土
 7. 淡灰白色砂質土
 8. 淡黄白色砂質土
 9. 淡白黄色砂質土
 10. 淡白黄色砂質土
 11. 淡灰白色砂質土
 12. 淡茶白色砂質土
 13. 淡茶褐色砂質土
 14. 淡茶褐色砂質土

を考えた。3・4号墳間の周溝は東側ほど明確でなく軟質の暗茶灰色砂質土が3号墳墳丘流出土とも考えられる淡灰白色砂質土を切って存在していたのでこれを周溝と考えた。

4. 埋葬施設

表土除去後検出を行ったが両墳とも検出できなかった。このため確認のトレンチを南北方向にも設定して確認作業を行ったが検出できなかった。調査前の開墾時に失われていたと考えられる。

第4節 高本5号墳

1. 調査前の状況

5号墳は比較的緩やかに延びてきた尾根が傾斜を強める位置にあたり、墳頂は狭い平坦面となっていた。このためか開墾もここまでは行われていなかった。しかし、墳丘南側は果樹園となり一段低く下げられていた。また、西側も削られた段があり古墳であるかどうかの判定を困難にしていた。ここでは、須恵質の埴輪片が表採できたので古墳と考えた。

2. 墳丘

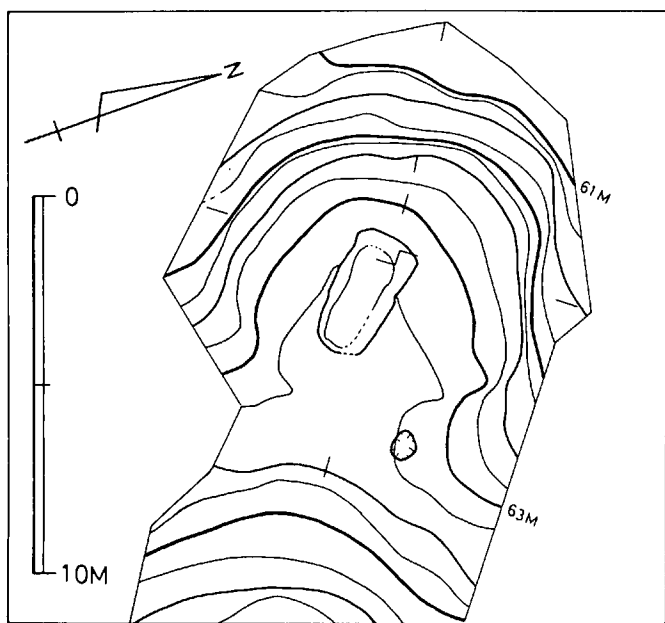
表土剥ぎに先立ち十字に畦を残した。表土は他に比べるとやや厚かった。東側では地山が直ぐに現われ4号墳間の周溝が検出された。残りの三方は畦に沿ってトレンチを入れ断面観察により墳端と周溝をさがした。この時この古墳が他の三基と異なり地山上に20cmの盛土が三層積まれていることがわかった。墳丘規模は南北7.4m、東西約9mの円形を呈する古墳と推定される。

3. 周溝

周溝は東側では地山を僅かに掘り窪めており北方向へと下がっていくが、南・西側では確認できなかった。須恵質埴輪と家形埴輪の破片は4・5号墳間の南部分で出土した。

4. 埋葬施設

主体部は墳頂のほぼ中央で検出できた。当初、主体部北隅が検出されたが墳丘東西トレンチの断面観察により墓壙西肩が確認されたため墳頂をかなりの範囲覆う淡黄白色粘質土を少し下げて検出を再度行った。その結果、長さ3.35m、幅1.7mの隅丸長方形の墓壙を検出した。墓

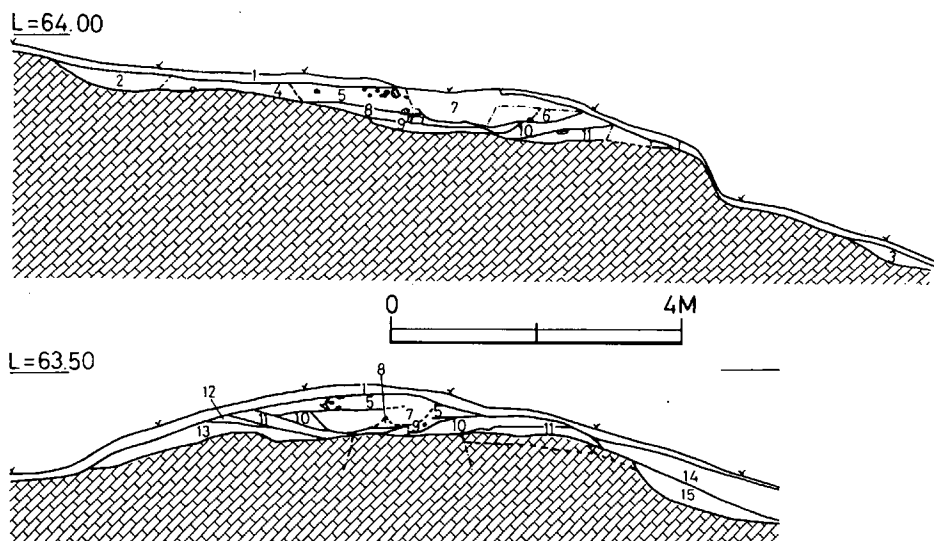


第16図 5号墳調査後 (S=1/200)

！堀り込みは、最後の盛土と
考えられる淡黄白色粘質土が
墓境内に沈んだためこの層の
薄い北側が先に検出された。
堀内には遺物及び棺痕跡も無
かった。ただ、堀内断面観察か
ら淡黄褐色砂質土の広がりか
ら棺の大きさと考えることはで
きると思われる。

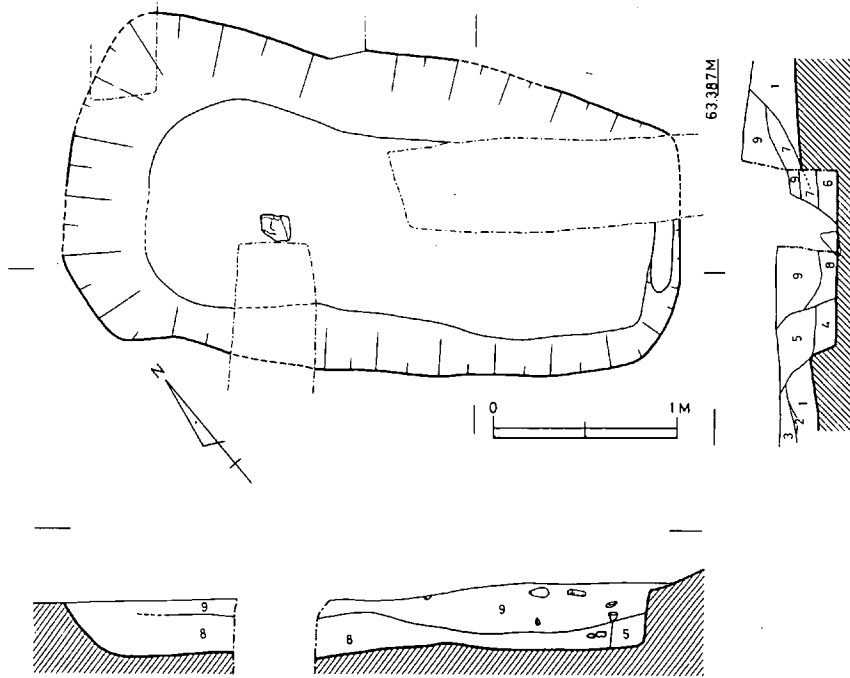
5. その他の遺構

5号墳西周溝部分で円形の



- | | | |
|-------------------|-------------|-------------|
| 1. 表 土 | 6. 淡黄褐色砂質土 | 11. 黄褐色砂質土 |
| 2. 淡灰白色砂質土 | 7. 淡黄褐色砂質土 | 12. 淡黄白色砂質土 |
| 3. 暗茶白色砂質土 | 8. 黄褐色砂質土 | 13. 淡茶白色砂質土 |
| 4. 淡黄白色粘質土 | 9. 暗黄白色粘質土 | 14. 淡白茶色砂質土 |
| 5. 淡黄白色粘質土 (礫を含む) | 10. 淡黄白色粘質土 | 15. 淡黄褐色砂質土 |

第17図 5号墳縦横断面図 (S=1/100)

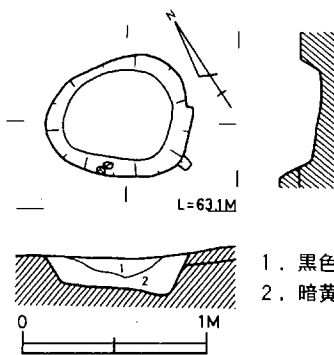


- | | | |
|------------|------------|------------|
| 1. 淡黄白色粘質土 | 4. 淡黄褐色砂質土 | 7. 黄褐色粘質土 |
| 2. 淡黄白色粘質土 | 5. 暗茶褐色砂質土 | 8. 淡黄褐色砂質土 |
| 3. 淡黄白色砂質土 | 6. 暗黄白色粘質土 | 9. 淡黄白色粘質土 |

第18図 5号墳主体部 (S=1/40)

土壌が検出された。この土壌は5号墳の周溝が少し埋まった後に掘られたと考えられるが土壌埋土上面で埴輪片が出土しているので古墳築造時期からあまり隔たらない頃の遺構と考えたい。

第5節 出土遺物



- | |
|----------|
| 1. 黒色砂質土 |
| 2. 暗黄灰色土 |

第19図 4・5号墳間土壌 (S=1/40)

3号墳から5号墳までに出土した遺物はほとんど埴輪片であった。埴輪には、円筒形埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪が認められた。

1, 2は、3号墳南周溝部と墳丘北西部で出土した須恵器の甕胴部と肩部である。外面は平行叩目文、内面の口縁近くはヨコナデ、胴部は同心円文をナデ消しているが、十分には消えていない。焼成は良好で色調は外面が灰白色、内面は青灰色を呈している。

3~8, 14~18, 20, 21は円筒形埴輪, 9~13は朝

顔形埴輪，22～31までは家形埴輪の破片である。19は朝顔形埴輪であろうか。

3～5は3号墳南西から4号墳南部で出土した。外面は第一次調整の縦刷毛目後第二次調整の横刷毛目を施している。内面は斜め方向の刷毛目の後、指頭によるナデで仕上げている。タガは突出度が高く断面が正方形に近い。焼成は良好で赤褐色を呈している。

6，7，8は4号墳南部から出土した。6の外面は第一次調整の縦刷毛目だけが認められ、赤褐色を呈す。7は最も薄く仕上がっていて第二次調整の横刷毛目が細く、淡黄褐色を呈す。8は外面剝離が進んでいて調整は不明、暗赤褐色を呈す。いずれも内面は指頭による仕上げ。8は3～7までが焼成が軟質であるのに対しやや硬質。

9の外面は、縦刷毛目の後表面を平滑にし、内面は横刷毛目調整。外面の色調は淡赤褐色だが断面は暗灰褐色を呈し硬質に焼成されている。10は外面の剝離が著しいので調整は分からない。内面は斜め方向の刷毛目調整で9同様刷毛目の幅は細い。色調は淡黄褐色を呈し軟質である。

11～13までは、4，5号墳間から出土している。いずれも暗灰褐色を呈し硬質である。口縁外面は縦刷毛目、内面は横刷毛目調整、くの字に外反する口縁端部近くと頸部外面はヨコナデ、頸部内面は斜め方向の刷毛目調整を行っている。胴部外面には第二次調整が認められる。内面は斜め方向の刷毛目を一部残しナデで調整、仕上げている。基底部は、外面縦刷毛目調整、内面は下から上にナデている。

14は淡赤褐色を呈し、外面は幅広い台形状のタガをはさんで第一次調整の縦刷毛目のままと第二次調整の横刷毛目が認められる段とがある。内面は、下から上に削ったままである。

15は、淡黄褐色を呈しやや焼成が他に比べ甘く、外面は第二次調整の横刷毛目が認められる。内面は、剝落が進み調整痕を残さない。

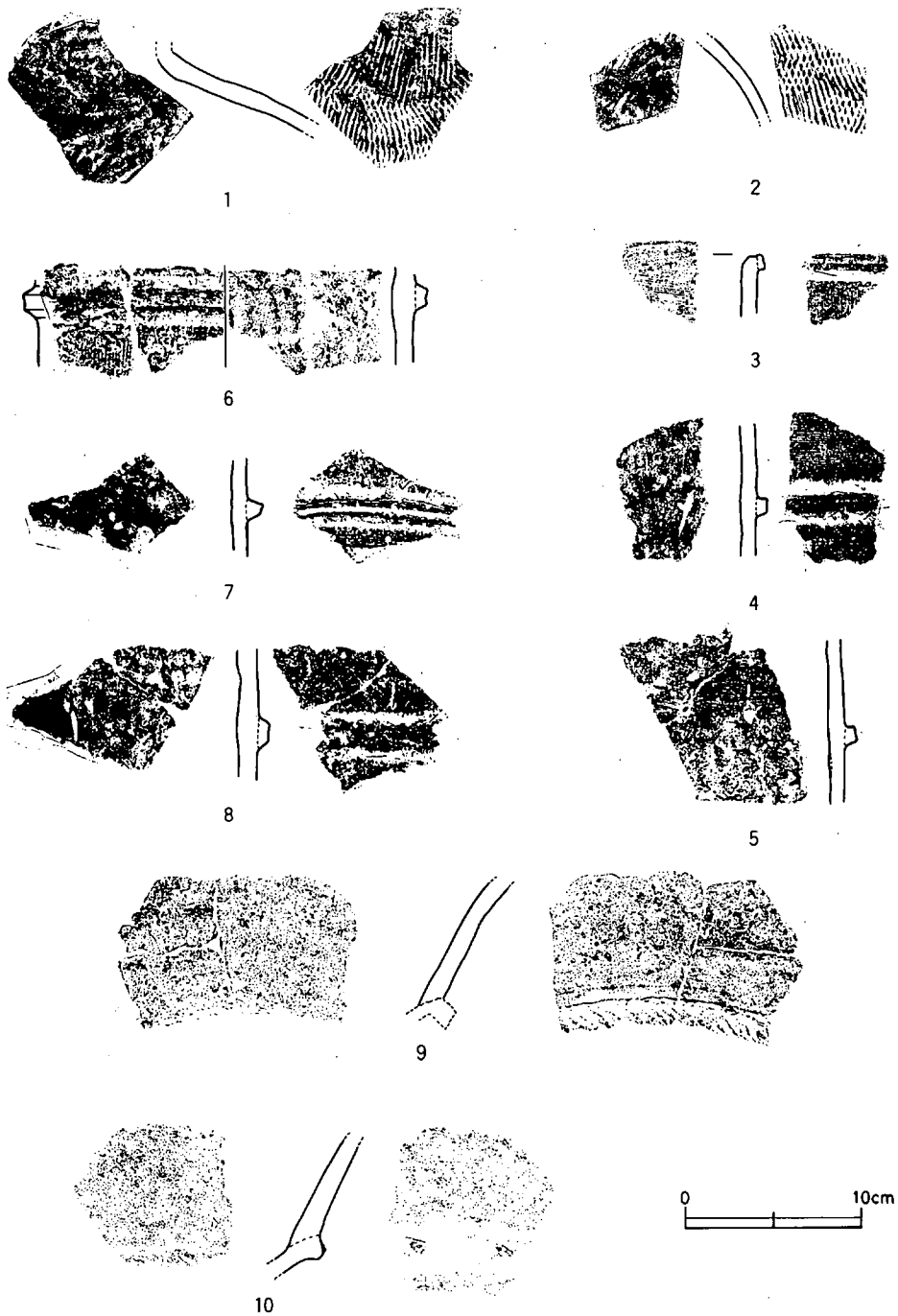
16～18は、5号墳南東部分から出土した。淡黄褐色を呈する口縁部で15に近似している。口縁端部は突出度の低いタガ状の帯を持ち上面を平坦にナデている。外面調整は第二次調整の横刷毛目が観察できるが内面は風化が進んでいて調整痕は認められない。

19は、8と色調・胎土が近似している。内外面はナデによる調整である。

20，21は、基底部で共に外面は縦刷毛目で調整される。内面は、指頭によるナデで仕上げられている。色調は共に淡赤褐色を呈し、焼成は良好である。21の方が少し条線幅が太い。

22～31のうち30は3号墳墳頂付近から出土し他は4，5号墳間から出土した。22，23，29，30は破風板で、24，25，26，28は屋根部で、25，26には網代を表現した線刻がある。27は妻側の屋根に接続する部分で31は基底部である。

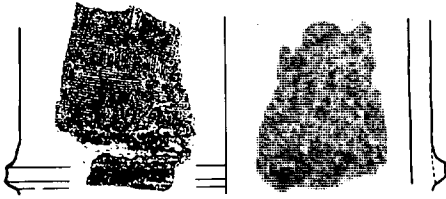
破片が少ないので正確な復元はできないが概ね図示したような切妻造の家形埴輪と考えられる。



第20図 出土遺物 1



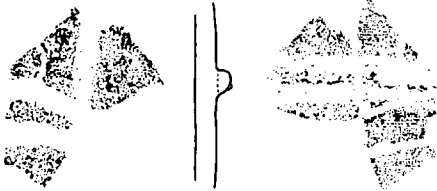
11



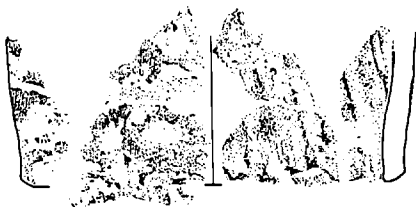
12



14



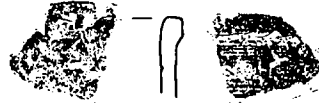
15



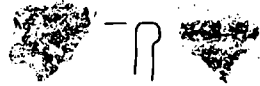
20



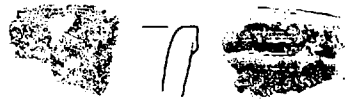
13



16



17



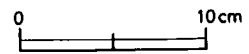
18



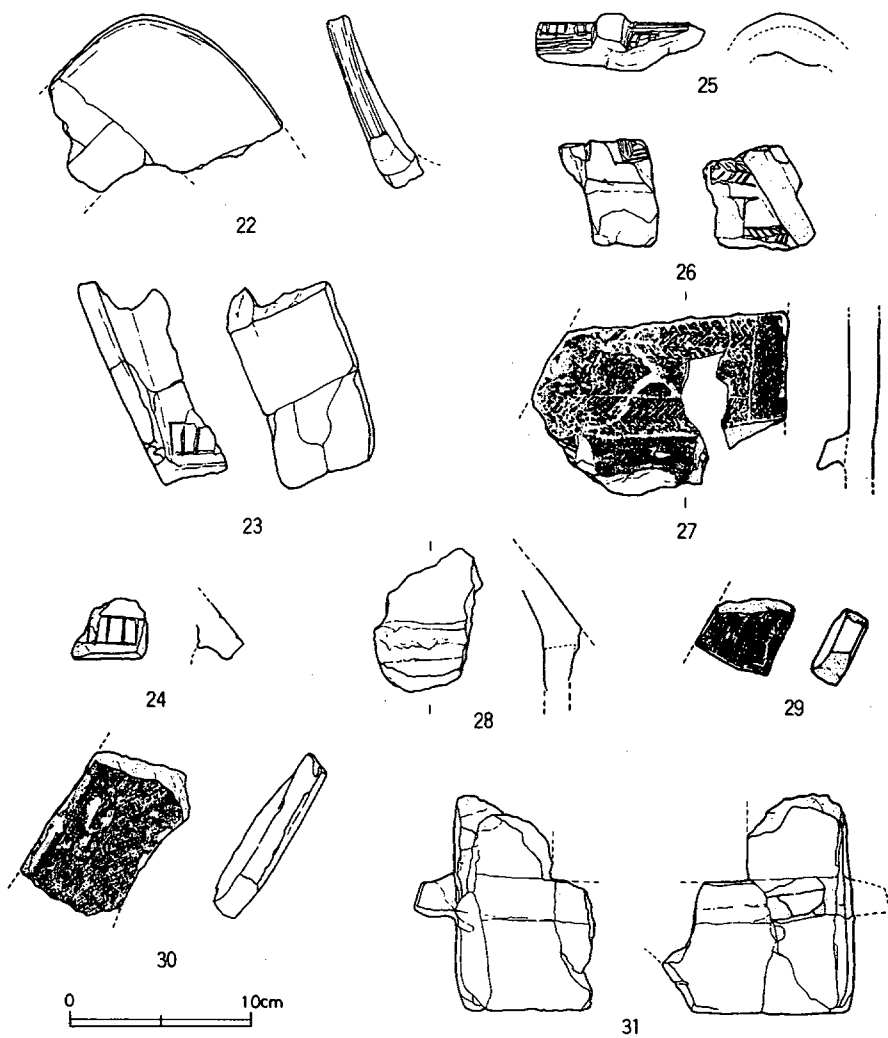
19



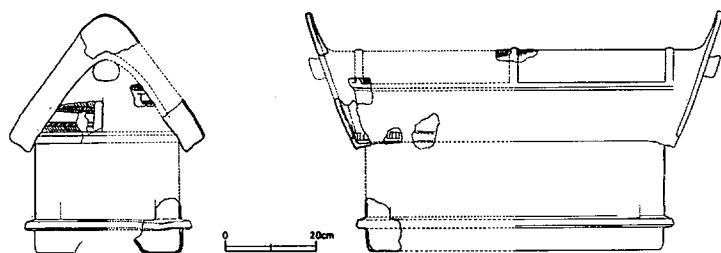
21



第21図 出土遺物 2



第22図 出土遺物 3



第23図 家形埴輪模式図

第6節 まとめにかえて

高本古墳群の調査は、4基の古墳を対象として行ったが、3・4号墳では既に後世の開墾が進み主体部を失い、埴輪の残存率も決してよくなかった。また、主体部の検出できた2号墳、5号墳においても副葬品を持たず古墳の時期や性格を考える上で資料不足の感があるが出土遺物から調査墳の築造時期を考察してみたい。

本市内では、三輪丘陵南端に位置する弥生時代終末期から五世紀中葉頃まで築かれた殿山古墳群(註7)が調査され、これにほぼつづく時期から五世紀後半に築造された三須丘陵のほぼ中央に位置する法蓮古墳群(註8)が調査されている。両古墳群と対比しながら基本的には『日本の考古学』(註9)の時期区分を用いる。

高本1号墳は、立地が尾根頂部に位置し葺石を持つなど前期古墳と考えられていた。今回は調査対象外であったが保存上本墳の墳端を確認するためトレンチを設定した。このトレンチから図示していないが二重口縁の壺型土器と考えられる土器片が出土した。また、2号墳西斜面から出土した甕形土器の胴部調整は外面刷毛目、内面ヘラ削りと布留式より古い要素を窺わせるので、ここでは前I期の古墳の可能性を考えたい。

3～5号墳からの出土遺物はいずれも現位置を保っていないので総括して見てみたい。1、2は内面同心文をナデ消しているのが完全でないのでTK208期(註10)を考え法蓮古墳群より後出と思われる。埴輪では、基底部の第二次調整、横刷毛目の省略。14のようにタガを隔てて縦刷毛目のままのものもあるが、口縁部以外においても第二次調整の横刷毛目が認められることから前III期から前IV期のなかで収まると考えられる。

以上のことから、高本古墳群は前I期に1・2号墳が築造され暫く経過して5世紀中葉以後3～5号墳が築造されたのではないと思われる。

註

1. 永山卯三郎『吉備郡史』巻上 1937年
2. 葛原克人「備中こうもり塚」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告35』岡山県教育委員会 1979年
3. 全長45mの前方後円墳、全長14mの横穴式石室内に家形石棺をもつ。総社市史編纂事業の一環として岡山大学考古学研究室が調査。
4. 文化庁 全国遺跡地図 岡山 1985年
5. 南北26m、東西20mの楕円形を呈する古墳、全長11.65mの横穴式石室内に家形石棺をもつ。総社市史編纂事業の一環として瀬戸内考古学研究所が調査。
6. 間壁葎子「砂子山古墳群」『岡山県大百科事典(上)』山陽新聞社 1980年
7. 平井勝「殿山遺跡 殿山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告47』岡山県教育委員会 1982年
8. 村上幸雄「法蓮古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告2』総社市教育委員会 1985年
9. 近藤義郎、藤沢長治「古墳時代(上)」『日本の考古学IV』河出書房新社 1980年
10. 田辺昭三氏の教示による。



高本古墳群全景

図版 2



1. 高本古墳群近景（北から）



2. 高本古墳群近景（東から）



1. 2号墳北西トレンチ (北から)



2. 2・3号墳間トレンチ (南から)

図版 4



1. 1・2号墳調査前の墳丘（西から）



2. 2号墳調査前の墳丘（南から）



1. 2号墳表土除去後（南から）



2. 2号墳表土除去後（北から）

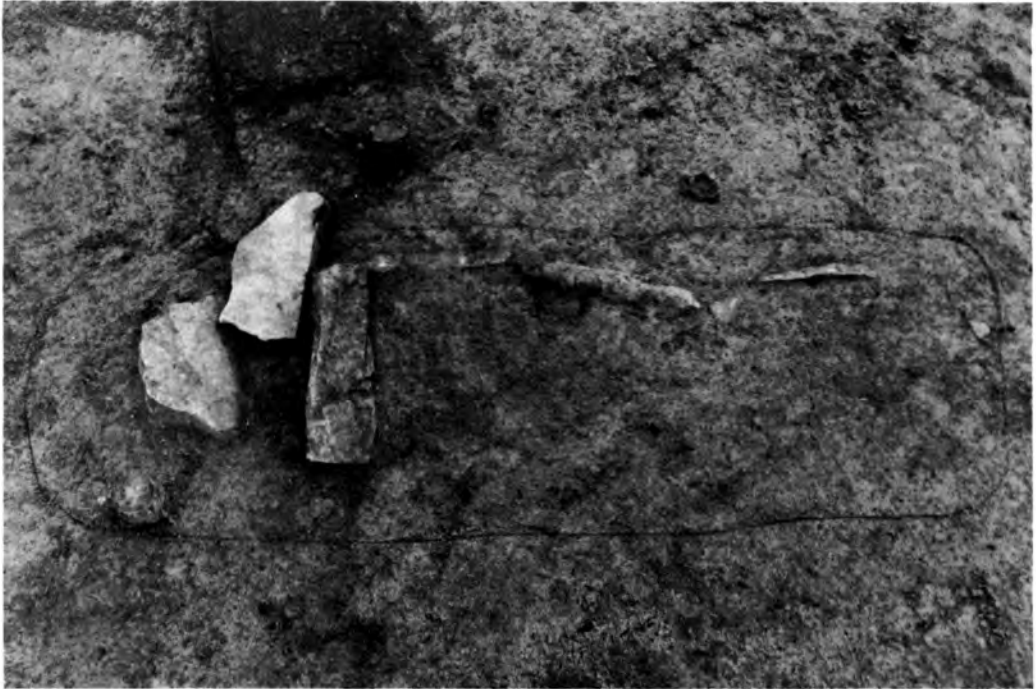
図版 6



1. 2号墳表土除去後（南東から）



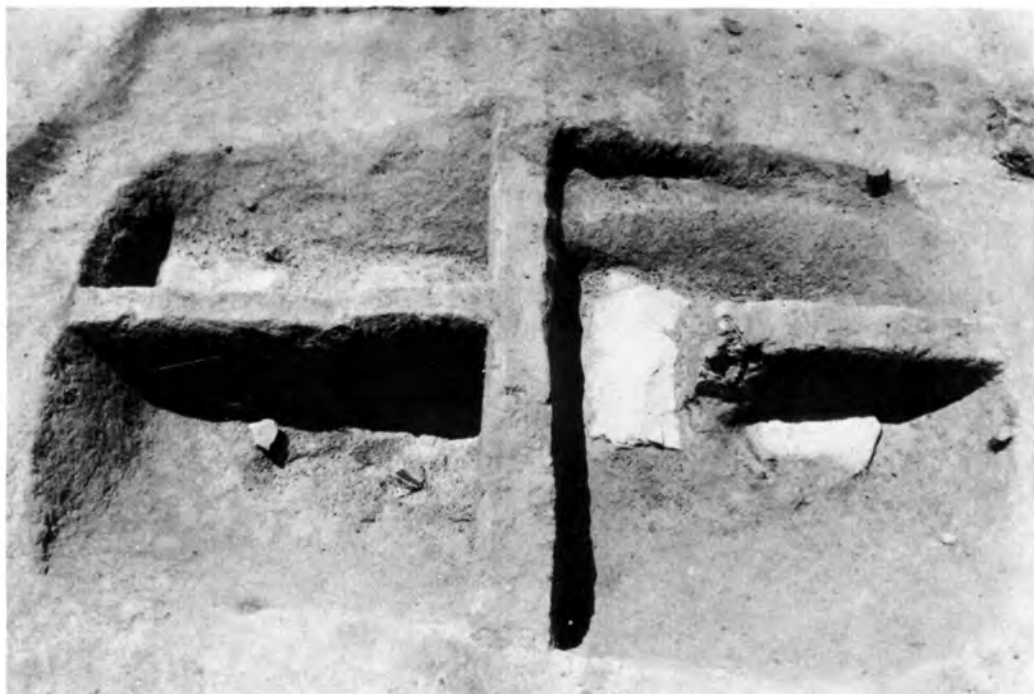
2. 第2主体部（西から）



1. 第2主体部 (南から)



2. 第1主体部〈向う側〉と第2主体部〈手前〉(北西から)



1. 第1主体部 (南から)



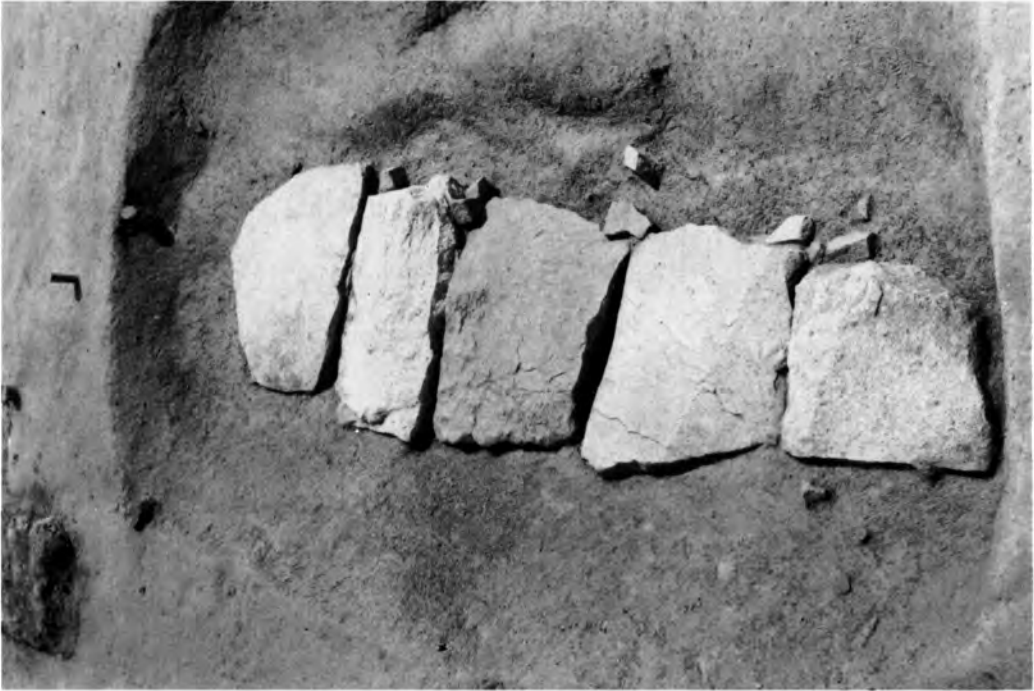
2. 第1主体部断面 (西から)



1. 第1主体部検出状態（南から）



2. 第1主体部蓋石除去後（北から）



1. 第1主体部 (西から)



2. 第1主体部蓋石除去後 (西から)



1. 第1主体部〈手前〉と第2主体部〈向う側〉(南から)



2. 調査後の墳丘(南から)

図版12



1. 2号墳調査後の墳丘断面（西から）



2. 第2主体部（西から）



1. 墳丘断面 (南から)



2. 周溝断面 (西から)



1. 配石遺構（北から）



2. 配石遺構（西から）



1. 3・4・5号墳調査前の墳丘（南東から）



2. 3・4号墳調査前の墳丘（南から）



1. 3号墳調査前の墳丘（北西から）



2. 3号墳表土剥ぎ



1. 3号墳調査前の墳丘（南から）



2. 調査後の墳丘（南から）



1. 4号墳調査前の墳丘（南から）



2. 調査後の墳丘（南から）



1. 3号墳墳丘断面（北西から）



2. 4号墳墳丘断面（南から）



1. 5号墳調査前の墳丘（北西から）



2. 表土除去後（南西から）



1. 5号墳墳丘断面（北から）



2. 5号墳墳丘断面（南から）



1. 5号墳墳丘断面（南西から）



2. 主体部断面（南東から）



1. 主体部断面（南西から）



2. 主体部断面（西から）



1. 主体部 (南東から)



2. 4・5号墳間土壙 (南から)



1. 3・4号墳調査後の墳丘（南東から）



2. 5号墳調査後の墳丘（西から）



1. 3・4・5号墳調査後の墳丘（南東から）



2. 3・4・5号墳調査後の墳丘（南から）



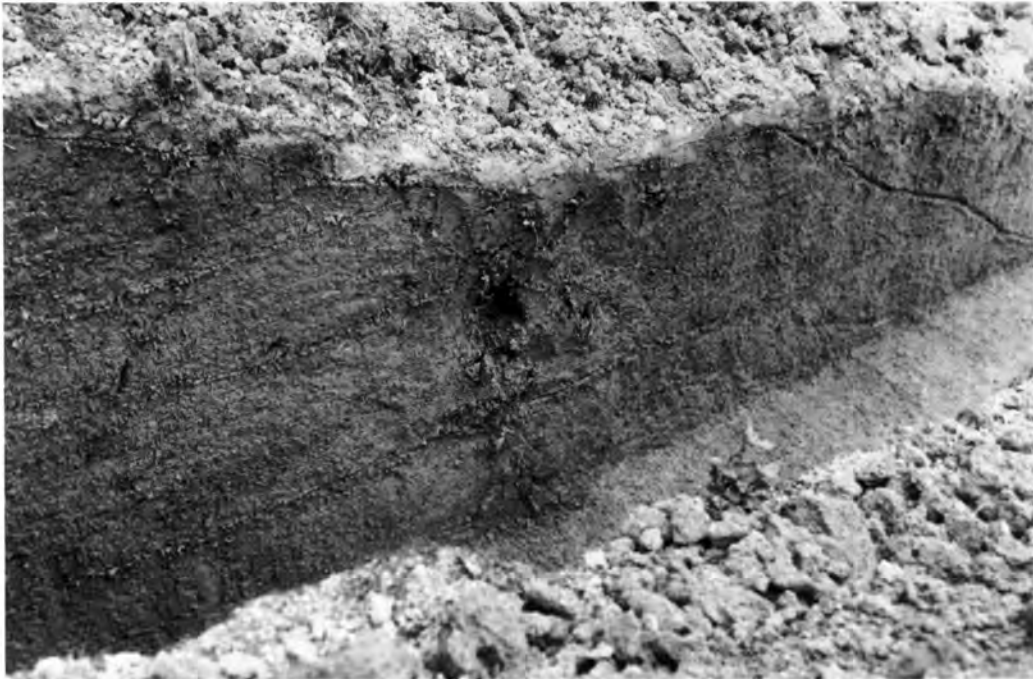
1. 1号墳調査前の墳丘（北から）



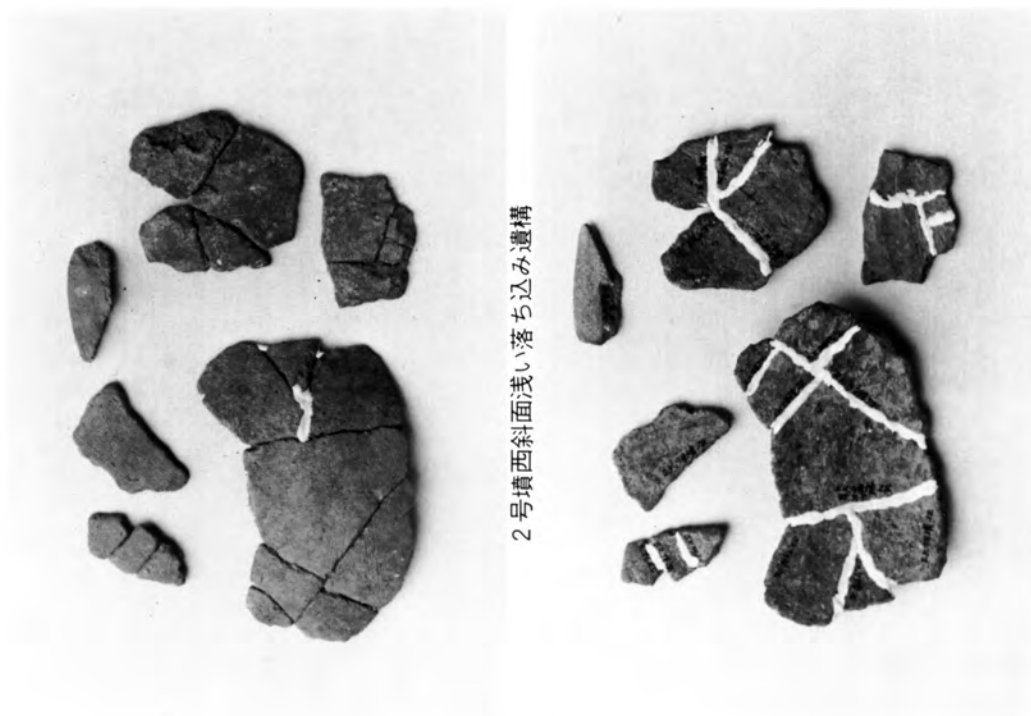
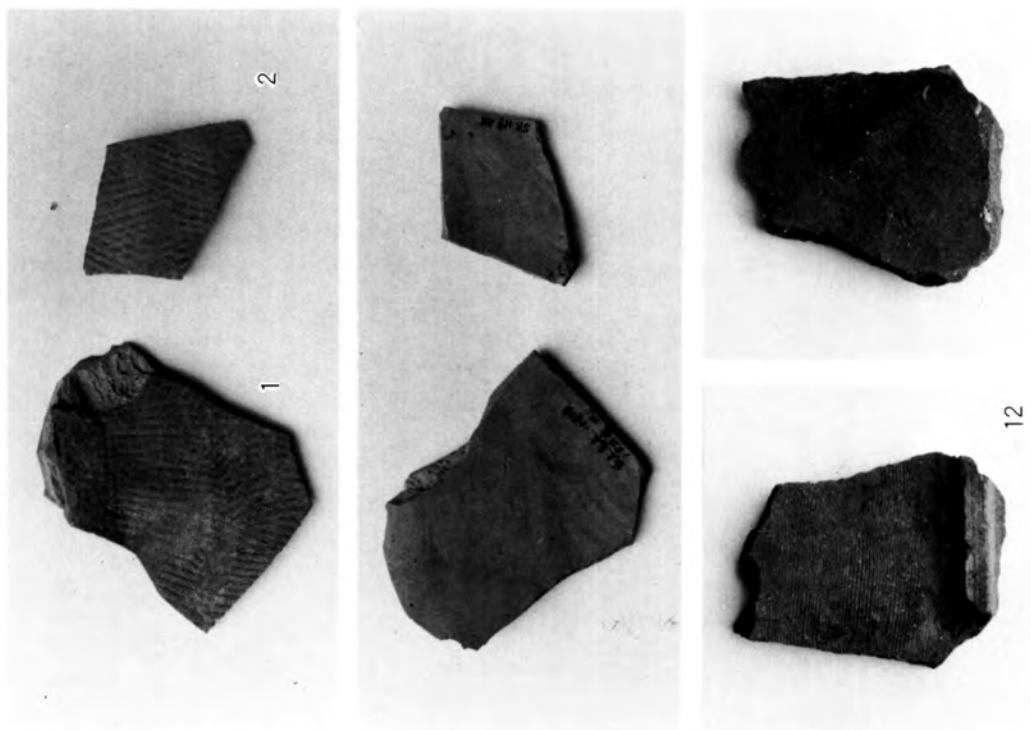
2. 1号墳墓石（北西から）



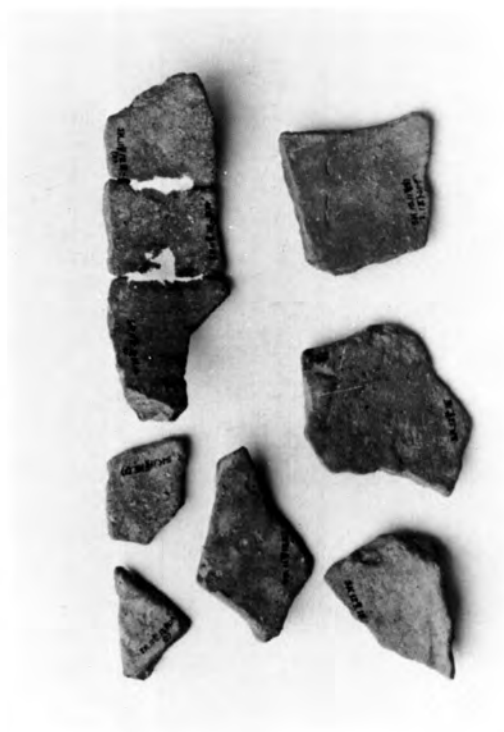
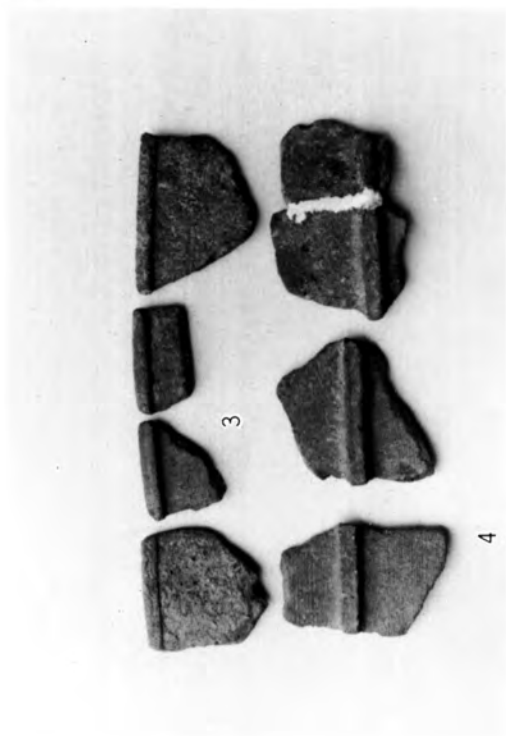
1. 墳丘断面（北から）

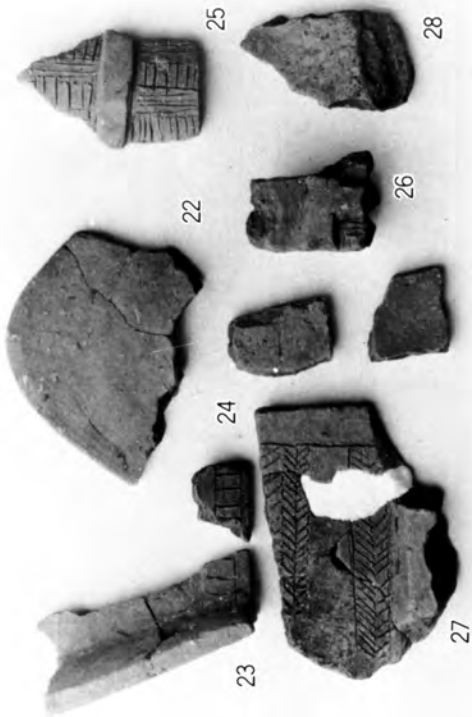


2. 墳丘断面（西から）



出土遺物 1





出土遺物 3

図版32



出土遺物 4

総社市埋蔵文化財発掘調査報告 3

高本古墳群

1986年3月 印刷
1986年3月 発行

編集発行 総社市教育委員会
総社市中央1丁目1番1号

印刷 柳本印刷株式会社
総社市総社1丁目10番24号

